

## 油彩

(テンペラ併用)

石榴と洋梨を描く②

## 三浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東京女子大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼境  
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(’96  
 ~’97) 春陽会会員

## 油絵具のメディウム(2)

## ―樹脂について―

前々回、画用液について種類別に分類しましたが、今度は少し詳しく述べてみたいと思います。第1回目は、樹脂についてです。

油絵の「油」とは、もちろん乾性油のことです。しかし、油絵具の歴史の中では、当初はむしろ樹脂が主役でした。つまり、「樹脂絵具」とでも言うべきものであったのです。

これと同じような絵具は、東洋ではさらに古い時代からあります。「漆絵」です。

漆は英語で「Lac」と言われるように、わが国で特に発達したのですが、湿度の高いところではか固まりません。油絵具が発明された頃には漆工芸品がヨーロッパに渡っていたことは事実ですから、これを見て彼の人々が触発された(か、どうかはわかりませんが)、輝きを持つ頑丈な絵を作りたいと思ったのは、想像に難くありません。

ヨーロッパは乾燥していますか

ら、漆ではなく、他の乾燥して固まる樹脂を使い、絵を作ろうとしたのです。

わが国では、漆は装飾工芸品に、絵画は膠で、というように役割が分化していきます。これは、その扱いの難しさが災いしているからなのですが、同様にヨーロッパでも「樹脂絵具」は、漆ほどではないにしても、同じ理由で絵画の表現では発展しませんでした。

その最大の原因は、乾性油が「酸化重合」反応で固まるのに対し、樹脂は揮発成分の蒸発で固まることに由来します。つまり、一度乾いた絵具の上に重ね塗りする時に再び下の層が溶け出してしまうのです。また、西洋絵画の求めている三次元空間の再現には、ほかしが絶対に必要なものでしたから、その乾きの早さは不都合だったのです。

では、「樹脂絵具」がまったく使われなくなってしまうのかというと、そうではありません。むしろ

ろその特質を生かし、乾性油と共存しながら発達していったところが、「漆絵」と異なるところです。現在でも、私たちが使用している市販の油絵具にも樹脂は入っていますし、いわゆる「溶き油」の中にも入っています。これは、乾性油の欠点を補うために、不可欠なものとして入っているのです。

## 樹脂の役割

では、その役割とは、いったいどういうことなのでしょう。

たとえば、乾性油だけの油絵具を盛り上げてみましょう。すると、表面は空気に直接触れていますので、先に酸化重合を起して固まります。その後、内部がゆっくりと酸素を取り込んで固まっていますから、その分、体積がふえることになります。その結果、表面の固まった部分を破ってしまうことになりま。いわゆる、亀裂が生じるのです。

それを防ぐには、一様に酸化す



図版1 フィンセント・ファン・ゴッホ

「鳥の飛びまわす」

一見、強烈な表現であるが、他の同時代の画家たちの作品が色褪せてきているのに対し、今日でもその輝きが失われずにいるのは、的確な材料を使用しているからである。

(表1) 目的別樹脂

目的	製品	主成分	使い方
乾燥を一時的に早める (触指乾燥)	バンドル	ダンマル、マステックなどの樹脂	絵具、メディウムに混ぜる
絵具に光沢と透明な 皮膚を与える	リクイン、ウインジェル、オレオパスト ストロング・メディウムなど	アルキド樹脂	
色の冴えを戻す	ヴェネチア・テレピン・バルサム	バルサム(針葉樹脂)	画面に塗布
ツヤを消す	マット・メディウム マット・ヴァーニッシュ	合成・軟質樹脂、ワックス	絵具、メディウムに混ぜる
絵具に硬さを与える	コーバル・オイル・メディウムなど	コーバル樹脂	絵具、メディウムに混ぜる
作品を保護する	タブロー、マット・ヴァーニッシュなど	ダンマル、マステック、合成樹脂	画面に塗布



図版2 レンブラント・ファン・レイン「自画像」  
白または明るい調子の厚塗りのモデリングの上に、鮮やかな色彩のグラッシを重ねているが、ヴェネチア・テレピン・バルサム、マスチック、サンシックスド、リンシード、テレピンの混合物が使われたと推察される。



図版3 エルンスト・フックス「肉体の変容」  
混合技法で描かれたこの作品は、油樹脂絵具を薄く重ねることで色彩の微妙な変化を作っている。



を挙げてみます。

## ■樹脂の種類

### ① 軟質樹脂

軟質樹脂の代表的なものに、ダンマルやマスチックがありますが、これらはテレピンなどの揮発油で簡単に溶解できます。

使い方としては、絵具に混ぜたり、ワニスとして画面に塗布したりして光沢を得る他、他の油・樹脂で乾燥の遅いものに混ぜて、一時的な乾燥の速さを得ることに使われます。

これをグラッシーなどに単独で用いると、樹脂絵具の弊害である、下の層の溶解や(注3)、流動性による液垂れ、乾燥の速さによるムラが生じてしまいます。

### ② 硬質樹脂

硬質樹脂は常温では溶けず、加熱した乾性油に溶かします。この硬さを生かして、光沢と絵具の堅牢性を与えることに用いられます。一般的には、コーバルなどを溶解した状態で市販されています。これは、乾性油と揮発性油がすでに入っているため、そのまま絵具に混ぜたり、メディウムに加えてりして使います。

### ③ 合成樹脂

合成樹脂は、あらゆる点で天然のものに勝っていますが、なにより歴史が浅く、今後数百年を得ない限り、確実なものとしての地位を得られないのです。しかし、現実には、市販のペインティング・オイルなどの中には、すでに使用されている例もあります。

### ④ バルサム

バルサムとは、松脂のような針葉樹の樹液のことを言いますが、主成分はテレピンとコロホニウムというもろい物質からなります。かなり粘性の強い液体で、乾燥が著しく遅いのが特徴です。

これによる皮膜はすばらしい輝きと透明性があり、グラッシー技法には最適のもですが、単独で用いることはまれで、他の樹脂と併用して、乾きの遅さやもろさの

欠点をカバーします。

## ■使用例

では、実制作においてはどのような使い分ければよいのでしょうか。いくつかの例を掲げますが、これがすべてではないことはいまでもありません。その他については、目的別の表を作ってみましょうので、参考にしてください(表1)。

### ① 盛り上げ表現

基本的には、絵具メーカーが最適な状態で材料を調合してありますので、そのまま使っても不都合はありませんが、さらに良好な画面を作りたければ、粘性の強い乾性油と速乾性の樹脂を加えてあげればよいのです。

具体的には、たとえば、サンシックスド・リンシード・オイルにバンドルやコーバルなどを加えて、メディウムとして使えばよいのです。これにより、光沢のある堅牢な画面が出来上がります。

ゴッホの画面は、他の同時代の画家たちに比べ、あたかも数日前に描かれたかのような輝きを保っていますが、このようにして作られたものと思われ(図版1)。

② グラッシーやフラットな表現  
薄く透明なフィルムを重ねて描

るように乾燥促進剤(シッカチーフ)を加えてあげればよいのですが、顔料によって乾燥速度が異なるため、加える量が大変難しいです(注1)。また、シッカチーフを必要以上加えるのは、さらに激しい亀裂の原因にすらなるのです。私たちが行うのは、一時的な乾燥を助けること、つまり、樹脂分を加えてあげることなのです。鉄筋コンクリートに例えると、樹脂分です。鉄骨ができ、後で乾性油が「コンクリート」のように固まります。鉄だけでは曲がってしまう、コンクリートだけでは割れてしまいますね。両方あって、強固なものができるのです。そして、もうひとつの役割は、樹脂の持つ透明性と輝きです。

樹脂には硬質、軟質、合成の各種樹脂と、バルサムがあることは前回述べました。木から直接抽出したものが軟質樹脂で、この樹脂が地下に埋もれ、半石化したものが硬質樹脂です。さらに、完全に石化したものが「琥珀」で、かつてはこれをワニスとして使ったという伝説がありました。現在では、科学的に不可能であるとされています(注2)。

いずれにしても、透明で、堅牢で、永久に輝きを失わない「琥珀」のような状態がワニスの理想であることは納得できることです。これを絵画に取り入れることは言うまでもありません。

次に、樹脂の種類と使い方の例



いていく技法では、ヴェネチア・テレピン・バルサムを使います(図版2、3)。

これを使った層は、描いた後ゆつくりと流れ落ち、平坦さを形成するのです。さらさらしたものは、描いた直後にさらさらと液垂れしてしまいます。

③ 勢いのある表現  
逆には、ブラッシュ・ストローク(筆触)を生かすような早描きに

調節は、粘性の強い乾性油と他の樹脂分を加え、揮発性油で筆のすべりを調節します。



(制作過程9)  
前号までの制作。2度目の固有色にテンペラ白を重ねたところ。

は、さらさらした状態と硬化の早さが必要になりますので、生のリンシードにバンドルや他の樹脂分とテレピンまたはペトロールを加えたものを使います。これはいわゆるペインティング・オイルと同じものです。

### ■「石榴と洋梨」での使用

先月号は、2度目の固有色とテンペラ白で浮き出しをしたところで終了しました(制作過程9)。

この後、油彩固有色とテンペラ白をさらに交互に重ねていきます



(制作過程10)

石榴と洋梨に、3度目の固有色を油彩で塗布。ヴェリジャン、カド・イエロー、バント・アンバー、ロリー・シェーナ。布にも2度目の固有色。シルバー・W、アイボリー・B、イエロー・オーカー。

が(制作過程10、14)、テンペラ白はハイライトに向かって、描く部分が増減していきます。それに対し、暗部については油彩、油彩、油彩、というように、重ね塗りをしていくこととなります。

このように、油絵具の上に薄く透明な層を繰り返して載せる場合には、前述のヴェネチア・テレピン・バルサムが効果を上げます(表2)。かなり粘つきますので、一度筆で置いてから、叩き筆のようなもので、薄く延ばしていきま

(注1) 一般的には、すでに絵具メーカーが調節して入れている。

(注2) ベルギーのメーカー、ブロックス社から、「琥珀のワニス」と「琥珀のメディウム」が出されているが、多分、これは半化石化した樹脂を使ったものと思われる。

(注3) 実際には、絵具に含まれる乾性油の重合によって溶解は少ないが、極端に薄めた場合はこの危険性がある。

(表2) 油メディウムの処方

処方1	乾性油	スタンド・リンシード・オイル (またはサンシクンド・オイル)	1容量	1容量
	樹脂	ダンマル樹脂 (テレピン400cc : ダンマル100g)	1容量	
	揮発性油	テレピン精油	1容量	

処方2	乾性油	スタンド・リンシード・オイル (または、サンシクンド・オイル)	2容量	1容量
	樹脂	ヴェネチア・テレピン・バルサム	1容量	
		ダンマル樹脂 (テレピン400cc : ダンマル100g)	1容量	
	揮発性油	テレピン精油	1容量	

かなり専門的に油絵を学んだ人でも、この樹脂の使い方に関してはいまいちしているのが実情です。いろいろ試して、経験的にどの組み合わせが肌に合う、ということだけで使っているのです。もちろん、それで十分なのですが、

樹脂の知識を持ってれば、試行錯誤を短縮できるはずですが(私自身、長い試行錯誤でした。否、進行形!)  
絵を描くということは、言うまでもなく精神的なことなのですが、同時に科学でもあるのです。



(制作過程13)  
布に油彩固有色シルバー・W、イエロー・オーカー、セルリアン・B、果実に最後のハイライト及び乱反射の微かな光をテンペラで起す。



(制作過程11)  
テンペラ白で明部の強調 布ももう一度テンペラで起す。

(制作過程14)  
布に最後のテンペラ白の浮き出し、果実のハイライトに極薄く油彩シルバー・W。



(制作過程12) 石榴、洋梨、皿のテンペラ部分に油彩を極薄く乗せる。同時に、暗部には油彩でのグラッシーを重ね、暗部の幅を広げていく。アイボリー・B、ヴィリジアン、カド・レッド他。

(制作過程15)  
布に最後の油彩シルバー・Wを薄くかけ、枝や背景部をテンペラ及び油彩で仕上げる。



完成作品 石榴と洋梨 F8号